

ひとの
ちから

CLOSE * UP



陽気会会員

雨郡詢子さん

あまごおり・じゅんこ 昭和14年生まれ、孤屋在住。趣味はフランス刺しゅうや洋裁。裁縫の腕を生かし、余り布で帽子やアームカバーを作ったり、近所の人の衣類の補正をしたりすることも。陽気会会員として、市内外でボランティア活動をしている。

今年7月、雨郡詢子さんは、所属するボランティア団体・陽気会から、荒尾市社会福祉協議会に一台の車いすを寄贈しました。この車いすは、雨郡さんたちが30年以上をかけて集めた「善意の結晶」です。

雨郡さんは昨年2月、長年営んだ駄菓子店を閉店しました。店は八幡小と荒尾四中に近く、地域の子どもたちに長く親しまれました。プルタブを集めて車椅子を寄贈しようと思いついたのは32年前。話を聞いた子どもや地域の人が、店にプルタブを届けてくれるようになりしました。こうして集まったプルタブは250キ口。陽気会が集めた約20キ口を足して換金し、寄贈した車椅子を購入しました。

「清里小学校から届けてくれた子どももいたんですよ」
集めてくれた子どもたち全員にお礼を言いたい、と、雨郡さん。一人一人を思い出しながら、顔をほころばせたい出を語ってくれました。

「よく叱っていましたね。あいさつしなさい、散らしたごみは拾いなさい、って」
口うるさい人だと思われてもいい、いつか思いが伝わればいい。してはいけないことをしたら容赦なく叱る。困っていたら面倒をみる。雨郡さんは店を通じて、地域の子どもたちを見守ってきました。店を閉めるとき、かつて常連だった子どもが遠方から成長した姿を見せに来てくれたと、嬉しそうに話してくれました。

雨郡さんは今も、地域の人やボランティア仲間には思いをはっきりと伝えていくそうです。周りの人や地域の人を信頼し、大切にしているからこそ向けられる優しさの形だと感じました。

「近所づきあいをしない人も増えていますが、何かあったとき本当に助け合えるのは近所の人。お互い助け合えるまちなしてほしいです」
雨郡さんの優しさは懐かしく、ときにちよつぴり辛口です。しかし大切な人への深い愛情が通っています。